

## 「梅毒血清学的検査」について

梅毒はスピロヘータの一種である梅毒トレポネーマ ( Treponema Pallidum ) を病原体として、主に性的接触により伝染する疾患です。

梅毒に感染した場合、数週間で性器に小さな(1cm 以内)硬結(硬いシコリやブツブツ)ができ、これが腫瘍に変わります。これは、痛みがないためわかりにくく、女性の場合ほとくに気付かない場合が多くみられます。その後、一度症状が消えますが、これは完治したのではなく潜伏期になったものと判断されます。そのまま放っておくと、バラ疹と呼ばれる小指ほどの斑の出没が全身で繰り返され、その他に発熱やリンパ節腫脹などの症状がでてきます。感染した人は、感染後4~6週間で血液(血清)中にトレポネーマと特定の脂質に対する抗体を持つようになるので、その抗体の有無を以下のような方法で検査しています。

ただし、下記のように、各検査方法で一長一短があることから、血液センターでは以下の2つの検査方法でともに陽性と判定された場合のみ、陽性のお知らせをしております。

### (1) 梅毒トレポネーマ ( TP ) 抗体検査 ( 化学発光酵素免疫測定法 : CLEIA 法 )

梅毒トレポネーマに対する抗体を検出します。CLEIA法は梅毒トレポネーマ抗原を吸着させたフェライト粒子と血液中の抗体が反応したものを化学発光酵素免疫法で測定する検査方法です。

特異性が高い検査法ですが、治療を受けて梅毒が完治しても抗体が残っていれば陽性反応を示す場合があります。

### (2) 脂質抗体検査 ( RPR 法 : Rapid Plasma Reagin Test )

トレポネーマの感染によって産生された脂質に対する抗体を検出します。

RPR法は脂質抗原(カルジオライピン・レシチン)を吸着させた炭素粒子と検体が反応して凝集することを応用した検査方法です。

梅毒の感染初期に産生される脂質抗体を比較的良く検出できる検査法ですが、梅毒患者以外でも陽性反応( BFP : 生物学的偽陽性反応 )を示す場合があります。